

松阪三品とは

戸塚 由美子 東京都稲城市

この「伊勢花菖蒲に就いて」の冒頭にある「松阪三品」とは、松阪三珍花、あるいは伊勢三花と呼ばれる「伊勢(松阪)菊」「伊勢(松阪)撫子」「伊勢(松阪)花菖蒲」を指します。

・伊勢菊

中輪型と大輪型があります。中輪型の由来は諸説ありますが、1412年(応永19年)伊勢の国司が京都より嵯峨菊の種を国に持ち帰り、松阪において培養、改良されたものといわれています。

特徴は、花弁は撚れ管状に見える平咲きで、弁先が、裂ける、巻き込む、何本かに分岐する、またはそれらが混じり合うなど、変化に富んだ咲き方をします。さらに、花弁は長く、縮れて垂れ下がり、繊細な咲きぶりです。色彩は鮮明で、白、黄、樺、桃、紅などの無地や、咲き分け、ぼかしなど変化に富みます。そして、高さが高中低三茎の「天、地、人づくり」に仕上がります。

また、大輪型は、現在5品種のみとのことです。



・伊勢撫子

1830年(天保元年)頃、紀州藩士継松栄治氏が、河原撫子を長年栽培していたところ、偶然花弁が深く切れ縮れて長く垂れたものを見つけ、これを育成改良し現在の品種を作出したと伝えられています。また、中国の石竹、オランダのあんじゃべる(一季咲きカーネーション)、河原撫子の交雑によるとの説もあります。

その特徴ですが、草立ちは柔軟で茎が細く、葉は黄緑で、花弁は一重の5~6弁で長く柔らかく縮れて垂れ下がります。長いものは15~20センチになります。色彩は単色を貴び、白、桃、朱、藤、紅、赤などです。開花時、自力では開きにくく、爪楊枝な

どで丁寧にほぐしてやるそうです。

・伊勢花菖蒲

由来は、諸説ありますが本文にありますので割愛し

ます。特徴は皆様ご存じの通りですが、花は三英咲き、縮緬地の薄弁で大きく互に重なってよく垂れます。花弁の垂れる様子によって、富士型、怒肩、地藏肩のタイプがあります。内弁(鉾)は立ち、花芯の先端は鶏冠状に切れ込みが入ります(蜘蛛手)。花茎は太く短く、葉と同じ高さに花を着けます。花色は、純粋で明るいものが多く、開花後、時間の経過とともに、花型色彩に変化をきたします。特に澄んだピンクや藤色など、現代の江戸・肥後系に与えた影響は大きなものです。また、染色体が25という異数体の品種が多くあります。

そして、伊勢花菖蒲は鉢栽培用に改良され、同じ鉢栽培の熊本花菖蒲と比較しても、その開花の姿や観賞の仕方など異なっています。

江戸花菖蒲や熊本花菖蒲が、葉から花茎がずっと引き出て咲き、勢いや重厚さを感じるのに対し、前述の通り伊勢花菖蒲の開花の姿は、実に柔らかく繊細で、慎ましく感じます。

さらに観賞法も独自のもので、「花壇」と呼ばれる室内での三段飾りになります。後方に屏風や満幕を、前方は鉢を隠すように蓆などを張ります。色彩を熟考し、彩よく、丈や葉や花の表裏に注意し陳列します。

以上、松阪三品について、簡単にご紹介してみました。伊勢松阪の地で、この地方独特の美意識で改良された花たち。伊勢松阪の気候風土、歴史文化、様々な事柄がかみ合って生まれた花だと思います。三品については、「松阪三珍花保存会」で大切に保存されています。私ども日本花菖蒲協会でも、この素晴らしい生きた文化財を、後世に残し、また発展すべく努力していきたいですね。

写真提供・神山康夫氏(松阪三珍花保存会) 無断転載禁止

